第２部　「いいな３村」・「ヤンパク」における広域交流拠点体制の活動実証

２．１　体験交流プログラムの実証(いいな３村)

「①体験交流プログラムの品質向上にかかる勉強会」および「②体験ツアーの「魅力」造成研修会」を開催した。

２．１．１　体験交流プログラムの品質向上にかかる勉強会

（１）勉強会実施の考え方

いいな３村のうち伊平屋村をフィールドに選定し、体験交流プログラムの品質向上を目的とした勉強会を実施した。本勉強会を行うにあたり、体験交流関連商品に対する知見や販売実績を有する旅行代理店担当者を講師として招き、講師によるアドバイスに基づいた議論を行った。

体験交流プログラムは、過年度に確立した“家族の学校”という商品コンセプトを踏まえ、地域の資源と想定顧客のニーズを踏まえた、家族での民泊体験を中心とした内容を想定した。

（２）勉強会の実施概要

伊平屋島観光協会で検討したイノー体験を参加者で実体験し、その後講師を囲んでの座談会においてフィードバック及び商品化に向けたレクチャーを行った。

（※会議資料は参考資料５、会議議事録は参考資料６を参照）

表2-1 体験交流プログラムの品質向上にかかる勉強会の開催概要

日　時	平成 28 年 10 月 13 日（月）　13:30～17:00
会　場	伊平屋村　前泊港ターミナル 2F 多目的ホール
参加者	【講師】株式会社近畿日本ツーリスト インバウンド事業部 福波次長 【グリーン・ツーリズム推進団体】 伊平屋島観光協会　西銘主任 伊平屋村歴史民俗資料館　西藤氏 一般社団法人いぜな島観光協会　上間事務局長 一般社団法人今帰仁村観光協会　又吉事務局長 【自治体】 伊平屋村 総合推進室　上原主事 農林水産課　前里主事補 伊是名村 商工観光課　東江課長補佐 【事務局】 沖縄県 農林水産部 村づくり計画課　崎間主任技師、金城技師 株式会社オリエンタルコンサルタンツ　小川、大城 株式会社アンカーリングジャパン　大島
プログラム	１．開会 ２．いいな３村広域連携の取組みの紹介 ３．体験交流プログラムの検討 １）現場見学/イノー体験プログラム ２）フィードバック及び商品化に向けたレクチャー ４．総括・閉会

表2-2 体験交流プログラムの品質向上にかかる勉強会の講師

講師	専門分野	所属・氏名	略歴
講師①	旅行業の従事者	株式会社近畿日本ツーリスト沖縄 インバウンド事業部次長 福波淳 氏	株式会社近畿日本ツーリスト沖縄に所属し、インバウンドの誘致に従事。地域資源を活かした企画造成のほか、募集型企画旅行・団体ツアーの企画造成を経験

（３）勉強会の実施結果

１）フィールドワーク

伊平屋島観光協会で検討した行程に基づき、現地ガイドによる注意事項やレクチャーを交えながらイノー体験を実体験した。

民泊体験プログラム

日次	月日(曜)	時間	行程	食事	宿泊
1	10/13（火）	12:20	前泊港着		
		12:40	入島式 ※入島式終了後、各民家さんの車に荷物積み込み		
		13:00	昼食		
		13:40	体験場所に移動		
		14:00	【イノー体験プログラム：(食べれる貝探し)】		伊平屋島
		14:20	危険生物の説明		民泊
		14:30 ～ 16:00	イノー体験開始		
		16:10	民家さんへ移動・家業体験	夕食	
		21:30	就寝		
	10/14（水）	06:30	起しょう・朝食・その他準備(洗面・部屋の片付け)	朝食	
		07:30	朝食		
		08:30	家業体験【歴史民俗資料館にて島の歴史を知る体験：島めぐり】		伊平屋島
		11:00	昼食	昼食	民泊
		12:00	離島式		
		13:00	前泊港出港		

図2-1 体験交流プログラムの行程とイノー体験の様子

2）座談会

体験交流プログラムの品質向上にかかる勉強会における講師によるレクチャーおよび議論した結果を以下に示す。

表2-3 体験交流プログラムの品質向上にかかる勉強会における意見

キーワード	体験交流プログラムの品質向上に向けた意見
イノー体験について	[意見交換] ・民泊体験の受入を実践した際に、子供たちや先生方(大人)よりイノー体験が好評であった。また、自分で取ってきた貝などに興味をもち、これを用いた調理を積極的に手伝う姿勢が子供に見受けられた。これらのことから、今回家族に提供する体験プログラムとして、イノー体験を採用した。 ・「島外から来る人は何も知らない」という認識に立って、詳細まで注意して伝えるように心がけている。受入側が細部にまで気を配ることで、参加者に島の魅力を存分に楽しんでもらい、それがリピーターにもつながると考えている。 ・事前にイノーに入る前の注意喚起は大切だと感じた。西藤さんの解説を動画に残したので、このビデオを資料化してイノー体験における安全管理資料にして展開できればと考えている。 [講師アドバイス] ・トイレの数も十分整備されており、さらに飲み物を確保するタイミングもちょうどよかった。ただし、外での体験が長時間になるようであれば、日陰のある場所で休憩をとることでだいぶ疲労感が軽減できるという印象をもった。
参加者のニーズ把握の必要性	[意見交換] ・参加者の年齢や団体の構成、さらにどういう所に興味をもった人なのか、これらの条件によって、ツアーの案内が変わってくる。 ・ただし、自然・海を相手にすると出発時間等の時間管理がシビアになるため、受け入れ側と送り手の情報のやり取りが特に大切である。 ・ターゲットや旅行の目的、どこに行きたいか(目的地)を、先に明確にしてもらえると案内ルート等を決めやすく、現場は非常に動きやすい。海や山のほか、歴史的な視点から天岩戸や三山・グスク時代の案内も可能である。正式に公開していない箇所もあり、今後どのように案内するかを検討することにより観光ポイントを増やすことが可能である。
現地ガイドの育成の必要性	[意見交換] ・ガイドの心得として、スタッフ全員が安全面のガイドを同じ言葉でしっかり注意できるようにマニュアルを作成するなどして準備しておく必要がある。 ・今帰仁村では観光案内ガイドがいる。しかし、ガイドを担うだけでは職業として食べていけない。そこで、民泊の受入農家にガイドを担ってもらうことを考えている。民泊受入農家に対してガイドのノウハウを教えていくこともよいのではないか。 [講師アドバイス]

	・人材育成について、しっかり安全喚起できる人が複数人いないことには、安全なツアーの実施が困難となる。安全管理やプログラムに係る知識について、人材育成が必要になるだろう。 ・さらに、家族の学校となると、3世代に及ぶ可能性がある。詳しく勉強して訪れる人から、高度な知識が求められる可能性もある。事前に来訪者のニーズを把握することで、学びの準備となるとともに、地域内における知識のネットワークの構築にも役立ててほしい。
長期滞在化に向けて	[意見交換] ・観光客に現地に長く滞在してもらうには、現地ガイドをつけて内容を深堀りし、参加者の関心に沿った詳しい案内にしてあげることが重要である。 [講師アドバイス] ・伊平屋村・伊是名村への旅行は、一泊二日の工程が多い。以前は、1便で伊平屋村を訪れ、その日の内に伊是名村へ移動し、一泊して翌日帰るというパターンもあった。観光客からは、伊是名村のほうが細やかなもてなしが受けられたと聞いたことがある。細かな対応を求める女性が伊是名村を好み、比較的に自由な旅を求める男性が伊平屋村を好む傾向があるかもしれない。 ・入域を意識するよりも“滞在時間を延ばすこと”に向けて取り組んだ地域のほうが、その後も長期ステイの観光客を増やすことができている。
“家族の学校”による民泊	[意見交換] ・現在の案では、“家族の学校”としては弱い印象がある。例えば、宿題を出すというのはどうか。参加者のお父さんには「民泊家庭のお父さんと違いはありますか？民泊家庭のお父さんの経歴はどのようでしょう？」など。朝食は、みんなでおにぎりをにぎって海で食べるのも楽しそうである。地元の人がやらないことを敢えてやってみるのも面白いのではないか。 ・島の人はお弁当を作って食べることはないが、このような非日常の中で会話が弾む。お父さんが調理する、子供が積極的に手伝会いをするという非日常も取り入れてはどうかと思う。 ・民泊体験した人の話では、食事面で満足できなかったという声も聞かれた。地元の食材を体験する地産地消も重要だと考える。 [講師アドバイス] ・これまで小学生～高校生を対象としていた民泊のターゲットを大人まで広げ、里帰りのようなイメージで修学旅行生の家族を呼ぶ案はとても良いと思う。民泊を提供する旅行会社としても魅力的であり、ぜひ“ストーリー”をもって取り組みたい。
大人を含む家族の民泊	[講師による問題提起] ・大人を受け入れるということは、リスクを抱える可能性があることを意識してほしい。昼間の体験プログラムは大人も子供も楽しめるだろうが、夕食後の過ごし方については、家族によってばらつきが出てくる部分である。 ・他人を他人の家に泊めることには危険が伴う。特に危惧しているのは、お

	酒を飲んだ場合である。喧嘩が始まった場合、事件が起こらないか心配である。また、何かあったときの責任の所在が曖昧になってしまう恐れがある。事件を未然に防ぐルールの構築が必要不可欠である。 ・民泊受入農家以外のコンシェルジュ(第三者)をおいて、夕食の時間には同席し、リスクを回避する方へ誘導する方法が考えらえる。また、大勢で BBQ のようなオープンな形にすることで予防する方法もあるのではないか。 ・モニターツアーを何度か重ねて、村内の受入農家のみなさんが納得した上で実施することが望ましい。 ・宿泊は宿泊を専門に実施している旅館等に任せるのも一つの手段だと考える。旅行会社としても、その辺りの意見については地元の声を聞きたいし、大人の民泊に二の足を踏んでいる状況である。 [意見交換] ・今帰仁村では、大人の民泊受入に対して賛否が半々であった。反対の声としては、大人に対しては気を遣うのだそうだ。さらに、自分より年上の大人には注意がしづらい。一方で、大人からの要望が細々と多い。料金を支払うため、サービスを期待しているのだろう。大量に飲酒された際のお酒に対するコストについても苦言が聞かれた。食事までを受入農家とともにし、宿泊は別がいいと思う。 ・子供だけ民泊農家に宿泊させて、大人はホテルに宿泊するという方法もあるのではないか。 ・離れることで、さらに親子の絆が深まることが期待できるかもしれない。

図2-2 体験交流プログラムの品質向上にかかる勉強会の様子

２．１．２　体験ツアーの「魅力」造成研修会

（１）研修会実施の考え方

いいな３村の連携による体験交流プログラムやツアー・プログラム案について、ターゲット層にその魅力がしっかり訴求できるよう、３村のプログラム提供者を中心としたメンバーを対象として、プログラムの魅力化や発信方法について研修会を実施した。

（２）研修会の実施概要

プログラムの魅力創出や情報発信に係る事例について、先進地域の関係者や旅行会社、体験プログラムの専門家を講師として招へいし、研修会を実施した。

なお、グリーン・ツーリズム実践者に幅広く参加していただくため、開催会場を今帰仁村とし、民泊の受入民家も本研修会において協議に参加して、現場レベルの意識高揚を図った。

（※会議資料は参考資料５、会議議事録は参考資料６を参照）

表2-4 体験ツアーの「魅力」造成研修会の開催概要

日　時	平成 28 年３月７日（月）12:30～17:00
会　場	あいあいファームセミナールーム
参加者	【講師】 高砂氏、大谷氏、岩崎氏、小林氏 【グリーン・ツーリズム推進団体】 伊平屋島観光協会 金城事務局長、西銘氏 伊平屋村の民家さん　新垣氏、安里氏 一般社団法人いぜな島観光協会 上間事務局長、前田氏 伊是名村の民家さん　名嘉氏、東江史江氏、東江文子氏 一般社団法人今帰仁村観光協会 又吉事務局長、相原氏 今帰仁村の民家さん　宮地ご夫妻、宍戸ご夫妻、上原氏、本藤氏、金城氏 【自治体】 伊平屋村 総合推進室 叶観光コーディネーター 農林水産課 前里主事補、宮城氏 伊是名村 農林水産課 名嘉主事、東江課長補佐 【事務局】 沖縄県 農林水産部 村づくり計画課　大嶺班長、崎間主任技師 株式会社オリエンタルコンサルタンツ　小川、大城 株式会社アンカーリングジャパン　中村、大島
次　第	１．開会 ２．魅力創出・情報発信の事例を踏まえた検討 ３．ツアープログラム作りの実践研修 ４．閉会

表2-5 体験ツアーの「魅力」造成研修会の講師

講師	専門分野	所属・氏名	略歴
講師①	観光地域づくり実践者・専門家	株式会社小値賀観光まちづくり公社/おぢかアイランドツーリズム協会 前専務取締役 高砂樹史 氏	•自給生活をめざし就農し2005年に小値賀町へ移住。 •「NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会」の設立に参加し、その後平成22年度より着地型旅行会社㈱小値賀観光まちづくり公社を立上げる。 •「島ぐるみによる観光まちづくり」を実践するとともに、古民家を再生したレストランや宿泊施設を活用する「新しい島旅」事業を実施してきた。
講師②	旅行業の従事者	近畿日本ツーリスト株式会社 中部営業本部 大谷晴信 氏	• 近畿日本ツーリストにおいて地域ビジネスの開発をミッションとする「営業推進室 自治体振興チーム」を立ち上げ、全国各地域の「観光振興(観光誘客・地域交流ビジネスの支援)」を担当。 • その後、地域振興事業部として、“地域を応援する事業〞を推進してきた。
講師③	魅力•情報発信の専門家	株式会社第一プログレス TURNS企画推進部 岩崎雅美 氏	• 雑誌「TURNS」にて、自治体や企業との企画・地域コーディネートを行い、地域の魅力発信の仕掛け作りや、地域・移住に関心のある人と地域をつなぐかけ橋を担う。
講師④	体験学習の専門家	一般社団法人沖縄体験観光協会副会長 小林政文 氏	• 年間200日以上のエコツアーガイドを経験。それらを活かし、現在は事務局、人材育成、広報、協働事業など幅広く担当。 •CONEトレーナー、プロジェクトワイルドファシリテーター、プロジェクトWETファシリテーター 等

（３）研修プログラムの内容

島しょ地域における観光地域づくりの先進地である「長崎県小値賀町」における魅力創出・情報発信の取組に関して基調講演を開催するとともに、着地型旅行について意見交換を行った。

また、過年度立案したいいな３村のコンセプト“家族の学校”の趣旨に基づき、ワークショップを通じたツアー・プログラム作りの実践研修を行った。

１）魅力創出・情報発信の事例を踏まえた検討

島の魅力を活かしたプログラムづくりや組織作り、情報発信のポイント等の視点から、長崎県小値賀町における取組に関して紹介いただき、講師とグリーン・ツーリズム実践者による意見交換を行った。

魅力創出・情報発信の事例を踏まえた検討 12:30～14:30　（講義：60 分、意見交換 60 分） 〇小値賀における取り組み紹介と意見交換 ・ 小値賀島の取り組みの紹介。 ・ 島の魅力のある受入プログラムづくりや、情報発信のポイント ・ 取組を持続させるための組織作りについて 〇講師 元 小値賀町アイランドツーリズム協会　高砂樹史氏

【講演要旨】

① 地域らしさを大切にすること。

・小値賀島の文化・自然・景観を多くの人が享受できる形で再生し、小値賀を愛するファンとともに磨き、次世代へと渡すことを目指してきた。
・地域住民の“住んで良し”に対して共感が生まれることで、訪れる人にとっても感動が生まれている。地域の潜在的な魅力をいかに顕在化するかということが重要である。
・観光に取り組むことは、あくまで地域の持続のための「手段」である。観光は目的ではない。そのため観光客に媚びる必要はない。
・島民力を磨いてきた。最大のオリジナリティは“人”であり、人は“人”に感動する。

②外貨の獲得・若者が暮らせる地域へ

・島の人に活躍の場を提供することで観光業のみならず各産業に活力をもたらし、島を離れたくない若者・島暮らしに挑戦したい若者が安心して暮らせる島を目指してきた。

③地域の観光ワンストップ窓口

・これまでのように、旅行会社が地域に人を送り込む形式ではなく、地域側でダイレクトに顧客の対応を行うワンストップ窓口を設置し、多様なニーズに対応し、受け入れにつなげる窓口を設置した。これは、旅行商品流通機構のイノベーションであり、マーケティング機能についてもこの窓口で担っている。

・提供できる民泊や体験プログラム等について、正確に顧客側に伝わる情報発信を行っている。誰でも受け入れを行えば良いのではなく、内容や楽しさなどしっかり楽しんでいただける方にマッチングすることが重要である。
・地域と来訪者のニーズがマッチしない場合には媚びず・押し付けず、他の地域を紹介することすらありうる。このようなコーディネートを実践してきた。

④行政と一体となったブランド形成

・初期の民泊の推進時においては、行政担当者ともよく意見交換し、民泊をやる意義について理解して頂いた。
・観光のために民泊をやるわけではなく、営利目的でもなく、行政に関わっていただくことを通じて、公益的な役割を果たしていることを発信してきた。
・これにより、地域の理解と協力を得て、継続的・発展的に事業を推進してきた。
・持続的な取り組みにするために、行政とのタイアップは不可欠である。

図2-3 基調講演の様子

２）ツアー・プログラム作りの実践研修

グリーン・ツーリズム実践者による①商品設計、②商品造成にかかるワークショップを段階的に行い、地域性や顧客ニーズを踏まえたツアー・プログラムの検討を行った。

ツアープログラム作りの実践研修
15:00～17:30　（レクチャー、ワーク、発表・フィードバックで 150 分）
〇ツアー・プログラム作りにかかるワークショップ
　①商品設計会議 /商品規模、対象者、販売方法、年次計画について協議
　②商品造成会議 /詳細プログラム内容の組合せ・商品パターンの構成、選定
〇講師
　元 小値賀町アイランドツーリズム協会　高砂樹史氏
　近畿日本ツーリスト株式会社中部営業本部　大谷晴信氏
　株式会社第一プログレス TURNS 企画推進部　岩﨑雅美氏
　一般社団法人沖縄体験観光協会副会長　小林政文氏

（４）研修会の実施結果

講師を交えた商品設計・造成のワークショップによる、ツアー・プログラム作りの実践研修結果を以下に示す。

１）商品設計会議（「私たちいいな３村の“家族の学校”ツアーをつくろう！」）

商品規模、対象者、販売方法、年次計画（可能性を含む）について協議した。

各班の検討結果を以下に示す。

ａ 各班の検討結果（Ａ班）

＜ツアープログラムの内容＞

○お父さんが“輝く”プログラム。（家族にみてもらう） ○住んで良しのプログラム。（暮らし、健康） ○昔ながらの遊び、知恵（野草や薬草）、一次産業を活用。

＜商品設計のポイント＞

	商品設計に向けた意見
提供できること・強み	・あそび、方言、野草の食べ方（健康） ・稲作や漁業（モズク、貝、イカ、魚） ・身近に釣りが出来る場所があったり、新鮮な魚を食べることが出来る。
コンセプト	・お父さんを見直す、活躍を見せられるプログラム。 ・島から伝えていきたいもの。 ・住んで良かったこと。
ターゲット	・家族

図2-4 Ａ班の検討の様子

b 各班の検討結果（B 班）

＜ツアープログラムの内容＞

○受入側が家族の気持ちとなり、誰でも来てもらえるものにする。 ○島の素朴な暮らしを通じて、生活体験の中で、ツアーの価値を伝える。 ○WEB 情報・広報活動をする。

＜商品設計のポイント＞

キーワード	商品設計に向けた意見
提供できること・強み	・島の人々との交流ができ、情報交換が楽しめる。 ・いやし。
コンセプト	・家族のように受け入れたい。 ・暮らすように旅をする。 ・家族の学校のコンセプト。家族だけを受け入れるのではなく、1 人の方でも民泊先が家族として受け入れる。 ・相手の要望に応えられるようにしたい。
ターゲット	・“大人”の受入。 ・多様な対象者。 ・お 1 人からでも受入可能にする。
課題	・魅力あふれる住み良い島づくり。 ・魅力的な村づくり。 ・“絆”づくり（ホストとゲスト、村内連携）
今後のアクション・計画	・大人の民泊体験でも貝殻細工制作などの体験も必要。 ・体験メニューを作り、パターンを用意する。 ・パンフの作成。HP での情報を探す方用に必要。 ・効果的な地域交流サイトと確実な紙媒体が必要。 ・販売方法を選択できる媒体。（WEB、紙パンフレット）

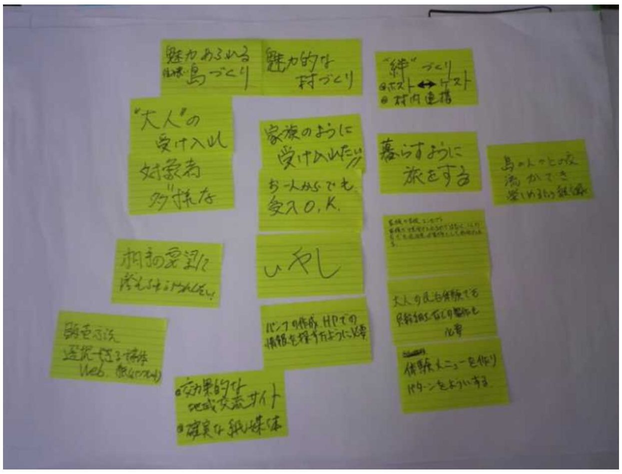

図2-5 B班の検討の様子

c 各班の検討結果（C 班）

＜ツアープログラムの内容＞

○いいなコンシェルジュに様々な情報や案内を対応させ、地域のスポット（ツアー・プログラム）を紹介することで、いいな体験を造成する。（家族になろうよ！この人とこんなことができる！）

＜商品設計のポイント＞

キーワード	商品設計に向けた意見
提供できること・強み	・海の透明度。 ・残っている豊かな自然。 ・３村での歴史体験ツアー。
コンセプト	・人柄を感じてもらう。 ・ゆっくりしてもらう。何もしない時間を過ごしてもらう。
ターゲット	・長期滞在者をターゲットとする。 ・企業向けのもの。 ・来てほしい人も選びたい。 ・望むものを組み立てあげる。
課題	・行事を見に来て欲しいが対応することができない。 ・“住んで良し”についての情報発信。 ・高級なものに欠けている。
今後のアクション・計画	・商品化と素材選び、料金の設定。 ・事務局は重要である。 ・観光客は２島に行きたいと考えている。

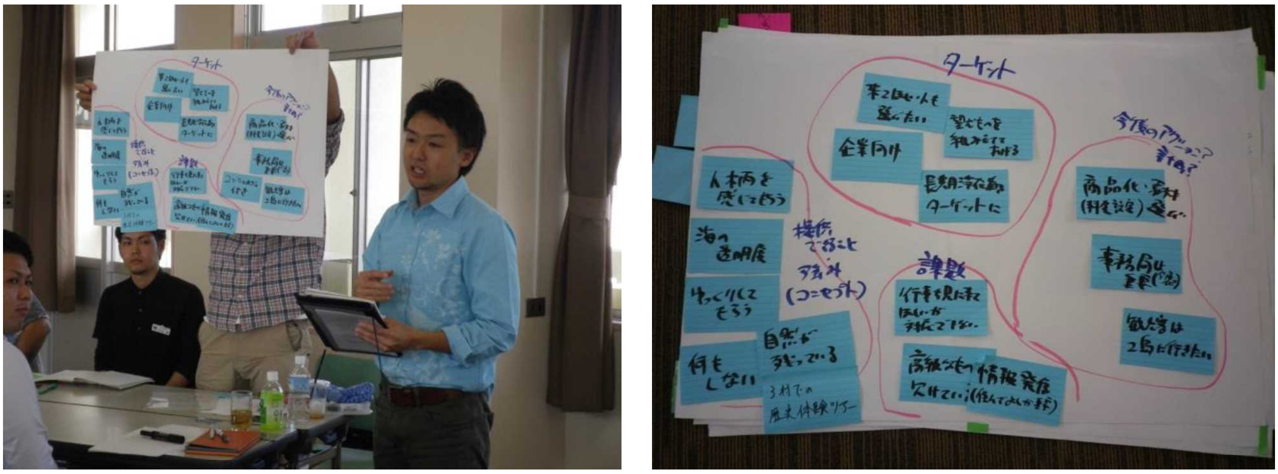

図2-6 C班の検討の様子

d 各班の検討結果（D 班）

＜ツアープログラムの内容＞

○村・地域行事の食卓や食事を提供。 ○地域のお年寄りを活用したヘルスツーリズム（健康ツアー）やウェルネスツアー。

＜商品設計のポイント＞

キーワード	商品設計に向けた意見
コンセプト	・3 村の皆さんと家族になる。
ターゲット	・大人。
今後のアクション・計画	・宿泊とコンシェルジュの連携。 ・部会で検討する。 ・民家でできることは民家で実施する。

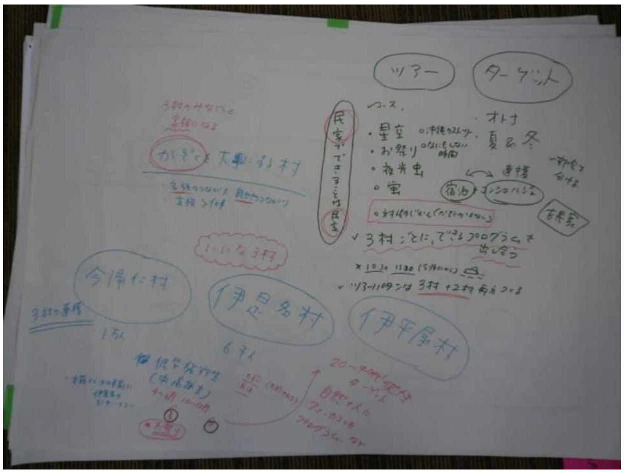

図2-7 D班の検討の様子

e 各班の検討結果（E 班）

＜ツアープログラムの内容＞

○「家族の絆」の強さ・深さがある。3 村のつながりから家族のつながりに結び付け、家族層の誘客につなげ、地域の家族とのつながりを作る。 ○女性客のニーズに自分と向き合う・見つめなおすというものがある。村や島で考え、過ごす時間を提供したり、一緒に地域の祭りを創ることをツアーにする。

＜商品設計のポイント＞

キーワード	商品設計に向けた意見
提供できること・強み	・行事食。出し方、レシピ。 ・カーサーを取りに歩く。餅をつつむ、殺菌、お茶等に活用する。 ・お年寄りと語る。（石垣、石敢當） ・健康長寿ツアー。 ・海での釣りやいざり。 ・星空。
コンセプト	・家族の学校。
ターゲット	・家族
課題	・魅力をうまく伝えること。

図2-8 E班の検討の様子

f 講師の総括コメント

○ターゲットは、グループ構成によって提供するサービスが変わることを考慮し、大人とファミリーに絞ってみてはどうか。 ○ブランドいいな・沖縄について、改めて健康・長寿をキーワードに“沖縄・いいな”の個性を磨くべき。 ○地域づくりの効果として、このツアー・プログラムを通じてリピーターや移住、定住者、いいな３村のファンの増加につながる取り組みにするべき。

2）商品造成会議

第１段階の検討結果に沿って詳細プログラム内容を挙げて組合せ、いくつかの種目と商品パターンを構成した。また、その中から先行的に販売できるものを選定した。
各班の検討結果を以下に示す。

a 各班の検討結果（A 班）
＜ツアープログラムの内容＞

○「健康と生きる力」をとりもどす。 ○田舎を知らない、団欒の時間がとれない東京の親子を具体的に想定する。 ○携帯の使えないデジタルデットクスツアー。

＜商品造成のポイント＞

キーワード	ツアー・プログラム造成に向けた意見
ツアーコンセプト	・「健康と生きる力」をとりもどす！ ・デジタルデトックスツアー。 ・デトックスにより大人には健康を、子どもたちには生きる力をとりもどす。
ターゲット	・両親とも東京都出身で田舎がなく、一家団欒の時間が少ない家族。 ・埼玉に住んでおり、お父さんは商社に勤め、お母さんは歯科衛生士のパートをしているため、食べ物に関するこだわりが強い。 ・４人家族で、東京勤務。お父さん 32 歳、お母さん 28 歳、長男４年生、長女２年生。
内容	＜事前＞ ・ゲーム、スマホは禁止と周知する。着信ガイダンスを入れ、緊急連絡体制も整える。 ＜1 日目＞ ・お父さんと男の子は釣りに行く。子供が小学生であれば船に乗り、魚をさばいて味見するなどの体験をする。 ・お母さんと女の子は野草鳥と貝殻ひろいをする。 ・持ち寄った食材を使って夕食作りをし、民泊する。夜はイザリ漁等にでかける。 ＜2 日目＞ ・朝は自由に散歩したり、旅を振り返ったりする。 ・午前中は棒術、三味線、エイサーなどの芸能プログラムを家族で学び、東京で披露できるようにする。 ・午後はさとうきびなどの農業体験を行う。 ・夜は午前中に学んだ芸能プログラムを村の人に発表する。